

## 代々木上原・駒場界隈の街を歩く

小田急小田原線 代々木上原駅 改札口前 集合・出発 東急田園都市線 池尻大橋駅で解散予定。約5.2km

### 1. 小田急小田原線 代々木上原駅

- 1927 (昭和2) 小田急小田原線全線開通。**代々幡上原駅**として開業。この頃までは周辺には人家が少なかったという。
- 1941 (昭和16) **代々木上原駅**に改称。
- 1972 (昭和47) 営団地下鉄 千代田線 霞ヶ関～代々木公園が開業。
- 1976 (昭和51) 上下線が高架化
- 1977 (昭和52) 千代田線との相互乗り入れに備えて新駅舎が完成
- 1978 (昭和53) 千代田線 代々木公園～代々木上原開業。相互直通運転開始。
- 1993 (平成5) 商業施設「アコルデ代々木上原」がオープン
- 2011 (平成23) 商業施設「アコルデ代々木上原」リニューアルオープン
- 2018 (平成30) 代々木上原駅－梅ヶ丘駅間が複々線化

**2. 井ノ頭通り** 渋谷駅前付近と武蔵野市境浄水場付近を結ぶ道路の通称。境浄水場から和田堀給水所までの間に水道管を敷設するための施設用地を道路に転用したために、以前は水道道路と呼ばれていたが、後に近衛文麿元首相によって井ノ頭街道と命名され、その後東京都によって井ノ頭通りに改められた。大半の区間は直線的な道路。富ヶ谷交差点から代々木上原駅南交差点までの区間が拡幅されて現在の姿になったのは平成以降。

**3. 宇田川** 川の名は、西原・元代々木・初台の一带が、宇陀野（うだの）と呼ばれていたことに因むという。宇田川は、代々木4丁目、初台、西原、大山町、上原あたりに複数の水源をもち、一带の田畑を潤していた。唱歌『春の小川』の題材となったという河骨川も支流のひとつ。各支流は代々木八幡宮の南側あたりで合流して南下、渋谷駅のすぐ北（宮益橋）で渋谷川に注いでいた。1964（昭和39）、東京オリンピックを前に暗渠化され、現在は下水道（宇田川幹線）になっている。宇田川町も、この宇田川が流れていたことに因む。

**4. 宇田川支流の谷・北側の階段** 17段（下から5・12段）

**5. 渡辺邸** 1930（昭和5）築 設計：山田 醇（やまだじゅん 1884－1969）

世田谷区の築山邸（砦8－18）も同氏の設計で、かなり似た外観。

**上原2－41・42の極小階段** 3段

**6. 久米民之助邸跡** 久米民之助（1861～1931）は工部大学校土木科を卒業後、宮内省に入り皇居正門石橋の設計にも携わった土木技術者。後に大倉組商会（現 大成建設）に入社、更に久米工業事務所を設立し、鉄道事業などを手掛けて成功。衆議院議員にもなった。代々木上原に約4万坪ともいわれる土地を所有し、800坪の邸宅を造り代々木御殿と呼ばれた。

1921（大正10）頃に紀州徳川家に譲渡して、久米民之助は上目黒に約3千坪の土地を購入し、RC造EV付きの住宅に引っ越した。紀州徳川家邸時代は「静和園」と呼ばれた。民之助の次男、権九郎は建築家となり久米設計を設立。長女万千代は沼田藩土五島家の養女となり五島姓を名乗り、後に小林慶太と結婚（→五島慶太）

紀州徳川家は金融恐慌の影響もあり財政が悪化したため、1938（昭和13）に代々木上原邸の大半を目黒蒲田電鉄・田園都市課に売却。同社が住宅地として200～400坪程度に分割・分譲した。徳川邸の敷地は約500坪で母屋と迎賓館（洋館）だけとなった。戦後はGHQに接収され、返還後は京浜急行社長の田中百敏邸となり、その後、洋館部分は岩佐多聞邸となった。

2020年までここにあった洋館は、久米民之助邸の洋館として1912（大正元）頃に建設されたもの。久米民之助の故郷である群馬県沼田市が取得し、2023年に沼田市内に移築復元された。RC造・平屋

**7. 東海大学代々木キャンパス** 大学本部があるキャンパスで山田守の設計による4棟の校舎が建つ。中央のX館（2号館）は、初期のFM東海の放送を行った建物。その後、キャンパスが手狭になったため、メインキャンパスを現相模高校の場所に移転し、さらに湘南キャンパスに移転した。（1号館 1955年 2号館 1958年 3号館 1959年 4号館 1960年・1962年）

**山田守**（1894～1966（明治27～昭和41）） 曲面や曲線を用いた個性的、印象的なデザインのモダニズム建築を造った。東京帝国大学建築学科在学中に青年建築家のグループ分離派建築会を結成。卒業後、通信省営繕課で電信局・電話局の設計を行った。関東大震災後は復興局土木部で聖橋などのデザインを行った。1945年に通信省を退官し、1949年に事務所を設立。東海大学の設立にも関わり、工学部建設工学科教授となった。

NTT門司電気通信レトロ館（旧門司郵便局電話課・1924） 東京中央電信局（1925・現存せず） 聖橋（1927）  
 NTT東日本千住ビル（1929・旧千住郵便局電話事務室） 萬代橋（1929・新潟市・国重要文化財）  
 東京通信病院（1937・現存せず） 東京厚生年金病院（1953・現存せず）  
 長沢浄水場（1957・川崎市多摩区、日本におけるDOCOMOMO100選） 蔦サロン・珈琲店（1959・旧山田守自邸）  
 東海大学短期大学部高輪校舎（1961） 東海大学湘南キャンパス（1962・日本におけるDOCOMOMO135選）  
 日本武道館（1964） 京都タワービル（1964）

**8. 三田用水** 1664（寛文4）三田上水として建設される。玉川上水から世田谷区北沢で分水し、目黒、白金を経て芝・高輪界限へ給水していた。1722（享保7）に上水としては廃止されたが、1725（享保10）から農業用水に転用された。

明治以後、目黒火薬製造所（1885）や、日本麦酒醸造会社（1887・サッポロビール）の設立に伴い、次第に工業用水として用いられるようになった。明治期の三田用水の使用割合は、灌漑用水が約3割、火薬製造所、日本麦酒、水車営業者の使用が約7割だったという。しかし流域の農村の宅地化が進み、戦後、本来の目的である用水を利用する農民がいなくなったため、水利権が認められなくなり、1974（昭和49）に通水停止。現在、水路は暗渠化されて道路などになっている。

**9. 目黒区立駒場公園** 加賀藩主前田家は本郷に上屋敷を構えていたが、明治期にその一部に東京帝国大学が造られた。

1926（大正15）、本郷の東大キャンパス拡張のため、隣接していた侯爵・前田利為の邸宅と、駒場の東京帝国大学農学部（旧駒場農学校）の敷地の一部を交換。前田侯爵家は駒場の東大農場跡地に移転して、16代当主の侯爵・前田利為（としなり 1885－1942）が駒場本邸として、洋館と和館を建てた。約4万㎡。

1929（昭和4） 洋館竣工 1930（昭和5） 和館竣工  
 1942（昭和17） 前田利為が事故死。邸宅は他人の手に渡り、一時期は中島飛行機の本社がおかれた。  
 1945（昭和20） 敗戦後、米軍に接収され、第5空軍司令官ホワイトヘッドの官邸となる。  
 1951（昭和26） 極東総司令官リッジウェイの官邸として使用された。 1957（昭和32） 接収解除。  
 1964（昭和39） 東京都の所有となる。  
 1967（昭和42） 都立駒場公園として開園。敷地内に日本近代文学館開館。洋館は東京都近代文学博物館となる。  
 1975（昭和50） 目黒区に移管 2002（平成14） 東京都近代文学博物館閉館  
 2018（平成30） 洋館がリニューアルオープン

**10. 旧前田侯爵邸** 国重要文化財（洋館、和館、渡廊下、茶室待合、和館門・塀、門衛所、正門・塀、土地約37,300㎡）

**洋館** 1929（昭和4） 設計：塚本靖・高橋貞太郎 RC造・銅板葺 3F+B1F

イギリスのカントリーハウスをも思わせるチューダー様式の外観。壁面はスクラッチタイル、車寄せ、とんがり屋根の塔が印象的。南面のベランダの上には、翼のあるライオン像がある。1Fは晚餐会を行なう社交の場で、2Fが家族の生活の場だった。全館集中暖房のため、各部屋の暖炉・マントルピースは装飾。大食堂の壁面には金唐紙が張られている。大型の階段室とステンドグラス、各部屋の装飾的な照明など見どころが多い。

**和館** 1930（昭和5） 設計：佐々木岩次郎 木造 2F 接客用に造られた書院造の和風建築。最初は洋館のみとする予定だったが、のちに外賓のための施設として和館も計画された。1階が一般に開放されていて、玄関から二の間、一の間（表座敷）と続く広間や、床の間、違い棚、付書院、欄間の透し彫などが往時のまま残されている。

**11. 日本近代文学館** 1967（昭和42）開設

**12. 目黒区立駒場野公園・ケルネル田圃** 一帯は明治期には駒場農学校（後の東京帝国大学農学部や東京教育大学農学部）があったところ。駒場農学校は明治政府が近代農学に基礎をおく欧米農法を取り入れるため、農業指導者を養成する学校として1878（明治11）に設置された。札幌農学校がアメリカ系の農業技術を導入したのに対して、駒場農学校ではドイツ系の技術が採用された。オスカー・ケルネル（ドイツ人）は駒場農学校の教師（お雇い外国人）として招かれ、日本の特質に配慮しながら農芸化学を応用した実験を中心に土壌、肥料などの研究と教育を行い、多くの成果を取めた。当時の実習用の田んぼが「ケルネル田圃」として現在でも維持・保存されている。維持・管理は近接する筑波大学附属駒場中学校・高等学校の生徒が行っている。駒場農学校は1886（明治19）に東京農林学校となり、更に東京農林学校、東京帝国大学、農科大学等を経て、東京教育大学農学部となり、1978（昭和53）につくば市に移転。

跡地の一角は公園として整備され、1986（昭和61）に目黒区立駒場野公園（面積2.8ha）として開園。

公園西部の池は空川の源流のひとつ。

**13. 東京大学駒場Ⅰキャンパス** 教養学部、理学部数学科、総合文化研究科、数理科学研究科

全ての学部前期課程の学生がここで学ぶ。正門を入れて正面に時計台（教養学部1号館（旧制第一高等学校本館））があり、同キャンパスを代表する景観となっていたが、最近、背後に高層の18号館が建設され、本郷キャンパスの安田講堂と同様に景観が破壊されたという声もある。

両キャンパスには、内田祥三、清水幸重の設計による、内田ゴシックと呼ばれる近代建築が残されている。

駒場には他に駒場Ⅱキャンパス（駒場リサーチキャンパス）があるが、通常「駒場キャンパス」といえば、駒場Ⅰキャンパスを指すことが多い。また「駒場」は東京大学教養学部を指すことも多い。

もともとこの地区は、東大農学部の前身である駒場農学校の校地だったが、1935（昭和10）に東大農学部は向ヶ丘の旧制第一高等学校と校地を交換して移転。代わって移転してきた旧制第一高等学校が、新制東京大学に包括され廃止されるまでここを校地とした。新制大学移行により、旧制第一高等学校に代わり東京大学教養学部がこのキャンパスに設置された。

- ・ **正門**（旧制第一高等学校正門・1938頃） 2008年に門扉の復元が行われた。
- ・ **1号館**（旧制第一高等学校本館・1933） 登録有形文化財。1号館の時計台は駒場Ⅰキャンパスの象徴。
- ・ **101号館**（旧制第一高等学校特設高等科・1935）
- ・ **900番教室**（講堂）（旧制第一高等学校講堂・1938） 教養学部で最も大きい教室。
- ・ **駒場博物館**（旧制第一高等学校書庫と閲覧室・1935） 美術博物館、自然科学博物館となっている。
- ・ **駒場ファカルティハウス**（国際学術交流会館、旧一高同窓会館・1937） 研究者交流と外国人研究者宿泊のための施設。最近まで同窓会館として使用されていた

**14. 駒場池（一二郎池）** 東大駒場キャンパス内にある空川の水源のひとつ。本郷キャンパスの三四郎池にならい、一二郎（浪）池などと呼ばれる。2008年に学内公募により、正式名称「駒場池」、愛称「一二郎池」となった。入学前に一人で見ると浪人するとか、入学後に一人で見ると留年するといったジンクスがある。

**15. 京王井の頭線・駒場東大前駅** 駅名は「駒場にある東大の前」ではなく、駒場駅と東大前駅が統合されたことに由来する。2つの駅の駅間距離は、現在の駒場東大前駅のホームの長さ程度しかなかった。井の頭線で唯一戦後にできた駅。

1933（昭和8） 帝都電鉄の東駒場駅、西駒場駅が開業。

1935（昭和10） 東駒場駅を、一高前駅に改称。

1937（昭和12） 西駒場駅を、駒場駅に改称。

1951（昭和26） 一高前駅を、東大前駅に改称。

1965（昭和40） 駒場駅と東大前駅を統合し、駒場東大前駅が開業。

**16. 空川（そらかわ）** 駒場野公園の湧水池や東大駒場キャンパスの一二郎池などを水源として目黒川に注いでいた。

**17. 駒場一丁目防災緑地の階段** 48段

**18. 空川跡から北東へ上る階段1** 25段 幅3.3m 長さ約17m 高低差3.3m 傾斜18°

**空川跡から北東へ上る階段2** 18段 幅2.0～2.4m

**19. 松見坂（まつみざか）** この坂から「道玄物見の松」がよく見えたためといわれる。道玄物見の松は、土族の道玄がその松に登って往来の人を見下ろし、手下に命じて衣服や携帯品を掠奪したためについた名。昔は、坂の北西に駒場野と呼ばれる広大な原野があり、その駒場方面に下る坂なので駒場坂ともいわれていたという。

**遠江橋（とおとうみばし）** 松見坂交差点西側を流れる空川に架かっていた橋。伊達遠江守が創設したことから付いた名。空川が暗渠化され、昭和40年代には松見坂が道路拡張されて谷そのものを渡る道になったため現在は橋跡も分からない。交差点の南西側に1899（明治32）に架けられたアーチ橋（新遠江橋）の親柱が保存されている。

**淡島通り** 道玄坂上と下北沢（森巖寺・淡島神社付近）を結んでいた道路と、現在の淡島交差点付近で分岐して調布市方面に向かっていた滝坂道が原型。20世紀前半にルート変更が重ねられ現在の形態となったため、名の由来である淡島神社付近は通らない。

**20. 空川の谷から西へ上る階段** 45段 幅2.2~4.0m 長さ約24m 高低差7.5m 傾斜17/23°

**21. 上目黒氷川神社（大橋氷川神社）** 旧上目黒村の鎮守で、天正年間（1573~92）に地元の旧家加藤氏が甲州上野原の産土神をこの地に迎えたものといわれる。境内社として、1878（明治11）に上目黒1丁目から遷された浅間神社と、1912（明治45）に合祀された北野神社がある。目黒区内には、現在の上目黒1-8に1812（文化9）に築かれた「元富士」と、1819（文政2）に現在の中目黒2-1に新しく築かれた「新富士」という二つの富士塚があった。元富士が1878（明治11）に取り壊された際、そこにあった浅間神社をここに遷座した。祠や石碑も1943（昭和18）に移され、1977（昭和52）には境内に目黒富士が築かれた。現在は毎年7月に山開きの例祭が行われている。

**男坂** 直 54段（下から2・52段） 幅2.1m 長さ約18m 高低差9.7m 蹴上18cm 踏み面30cm 傾斜31°  
階段下の男坂（石坂？）再建供養塔は1816（文化13）年・丙子設置のもの。1905（明治38）年に大山街道（現在の246・玉川通り）拡幅の際に急勾配の石段に改修された。大山道の道標は、1842（天保13）年建立。

**女坂** 屈折 52段（下から18・20・8・6段）  
幅1.8m 長さ約20m 高低差7.4m 蹴上14~15cm 踏み面30~32cm 傾斜24~27°

**女坂途中から分岐する階段** 19段 幅1.0m 長さ5.7m 高低差3.8m 蹴上20cm 踏み面30cm 傾斜34°

**目黒富士登山道** 蛇行 50段（下から14・7・24・5段） 男坂の西側にハイキング道のような土留めステップで造られた階段。

**22. 大橋** 目黒川に架かる国道246号（玉川通り）の橋。大橋という付近の地名もこの橋から来ている。

江戸時代、この近辺では川幅が広く、大きな橋を架ける必要があった。文化年間（19世紀初頭）ごろ、上目黒村の人が幕府に願い出て、長さ7間×幅9尺の土橋を架けたという。長さ約13mの橋は当時としては巨大で、大橋と呼ばれるようになったという。大橋は1927（昭和2）に鋼鉄製の桁橋になり、その後、首都高の建設に際して1964（昭和39）に、現在のものに架け替えられた。

**23. 山手通り（環状6号線）** 品川区から、板橋区に至る都道。環状5号線（明治通り）や環状7号線（環七）が都内をほぼ一周するのにに対し、環状第6号線である山手通りは都心の西側にしか存在しない（戦前は環状の計画だった）。

**首都高速道路中央環状新宿線・山手トンネル** 高松入口と大橋JCTの間。総延長18.2kmで日本一長い道路トンネル。道路トンネルとしてはノルウェーのラルダールトンネル（24.5km）に次ぎ世界で2番目、高速道路のトンネルとしては世界最長。

高松~西新宿JCTは2007（平成19）に開通、2010（平成22）に西新宿以南の代々木・富ヶ谷周辺、大橋JCTまでが開通。そして大橋JCT~大井JCTが2015（平成27）に開通して全面供用された。

**24. 玉川通り** 明治通りとの交差点から多摩川（新二子橋）の区間は玉川通りと呼ばれる。地下には田園都市線が走っている。現在は片側3車線だが、戦後しばらくは片側1車線で、かつ、玉電が併用軌道で通り、歩道もなかった。その後、拡幅が行われ、大坂、渋谷付近では片側5車線となった。玉電の廃止後、車道の一部と、玉電軌道部分を利用して首都高速3号渋谷線が建設された。それまでは大坂から富士山が良く見えたが、首都高の建設によりその眺望は失われた。

1927（昭和2） 玉川電車溝口線開通。二子橋上に軌道が敷設され、併用軌道となる。

1965（昭和40） 一般国道246号となる。国道1号のバイパス路線として注目され、重点的に整備された。

1969（昭和44） 東急玉川線廃止。併用軌道解消。

1971（昭和46） 渋谷~用賀の国道上空に首都高速3号渋谷線が開通。

**国道246号線** 江戸時代に東海道が整備されると、それ以前の足柄道に沿う形で新たに「矢倉沢往還」が整備され、東海道の脇往還として利用された。享保年間になると大山講が盛んになり、大山に詣でるための街道としても賑わい、この頃から矢倉沢往還は「大山道（大山街道）」とも呼ばれるようになった。現在の国道246号はほぼこれにあたる。

**25. 大坂（新道）・大坂橋陸橋** 空川の谷とその暗渠上を通る山手通りを跨ぐ国道246号線の陸橋。

**26. 大坂** 厚木街道（江戸から厚木まで）の間にあった四十八坂のうち、急坂で一番大きな坂だったので、大坂と呼ぶようになったといわれる。現在の玉川通り（国道246号線）の坂は新道。

**27. 首都高速道路 大橋ジャンクション** 首都高速3号渋谷線と中央環状線をつなぐ。中央環状新宿線の西新宿JCT～大橋JCT間の完成に伴い、2010年に一部供用開始。中央環状品川線の大橋JCT～大井JCT間が2015年に開通して全面供用された。

山手通りの地下約36mにある中央環状線と、山手通りの上空約35mにある高架の3号渋谷線では、高低差が約71mあるため、一周約400mのループを2周半回る連絡線で両者を結んでいる。ループ部分には広大な土地が必要だったため、ループ周囲にビルを建設するなど、付近一帯も含めた再開発が行われた。この場所には1969（昭和44）までは東急玉川線の大橋車庫があり、玉川線の廃止後は東急バス大橋営業所だったが、これも2002（平成14）に廃止され、ジャンクション用地となった。

ループ部分は国立競技場と同程度の敷地面積で、騒音対策のため4層のトンネル構造になっている。また、排気ガス対策のためループの内側部分には換気所が設けられ、屋上部分にはマンションと直結する目黒天空庭園が造られた。

**目黒区立目黒天空庭園** 2013（平成25）開園。目黒区が首都高速道路から占用使用許可を受け、都市公園法に基づく立体都市公園として整備した。面積約7,000㎡。高さは地上11～35m、延長約400m、平均勾配約6%

**オーバス夢ひろば** ループの内側にあるフットサルコート、じゃぶじゃぶ池などの施設。

**プリズムタワー** 27F、約98m。2009（平成21）竣工。総戸数219戸の分譲マンション

**クロスエアタワー** 42F、約156m。2012（平成24）竣工。総戸数689戸の分譲マンション。11F以上がマンション部分で、低層部は公共施設。庭園と直結する9Fには目黒区立大橋図書館などがある。

**28. 目黒川** 世田谷区、目黒区、品川区を流れ東京湾に注ぐ二級河川。世田谷区三宿の東仲橋付近で北沢川と烏山川が合流して目黒川となり南東へ流れ、品川区の天王洲アイル駅付近で東京湾に注ぐ。大橋より下流は開渠。清流復活事業として、目黒川を流れる水の大部分は、新宿区落合にある東京都下水道局落合水再生センターで下水を高度処理したものを導いている。

**29. 目黒川緑道** 北沢川と烏山川が合流する目黒川の起点から国道246号の大橋までの600m強の区間は暗渠化され、地表部分には人工のせせらぎが設置された目黒川緑道（2009に緑道化）が整備されている。

**30. 東急田園都市線 池尻大橋駅**

1977（昭和52）に新玉川線の駅として開業。2000（平成12）以降は田園都市線の駅となった。

池尻は世田谷区、大橋は目黒区で、地名や橋名の池尻大橋はない。玉川線時代に、世田谷区池尻町に「玉電池尻」、目黒区上目黒に「大橋」という電停があり、このほぼ中間地点に設置されたため。現在の駅も区界上にある。

## 【その他】

**31. 東京ジャーミイ (Tokyo Camii)** 宗教法人・東京トルコ・ディヤナト・ジャーミイにより運営されている回教寺院(モスク)。トルコ共和国在東京大使館所属で、イスラム教やトルコ文化を紹介するトルコ文化センターが併設されている。

1917年のロシア革命の際にロシア国外に逃れたイスラム教徒(タタール人)数百人が日本に居住し、1924(大正13)に東京回教徒団が結成された。そして寄付をもとに、ロシア出身のたちのためのサラセン式ドームを持つモスクが建設され、1938(昭和13)に初代礼拝堂が木造で完成。同モスクは在東京のトルコ国籍ムスリムや、地元の人々に親しまれてきたが、老朽化のために閉鎖され、1986(昭和61)に取り壊し。その後、当初の亡命タタール人たちがトルコ共和国の国籍を取得していた縁から、トルコ宗務庁の援助によってオスマン様式で現在のモスクが建設された。

東京ジャーミイは2000(平成12)開堂。「ジャーミイ」は、トルコ語で金曜礼拝を含む1日5回の礼拝が行われる大規模なモスクのことで、「人の集まる場所」を意味するアラビア語が語源。トルコ人建築家の設計により、建物の上階に礼拝堂を設け、大ドームを載せて広い礼拝空間を確保する、トルコではよくみられる形式を踏襲している。躯体工事は鹿島建設が行ったが、内外装の大部分にトルコから送られた資材が用いられ、100人近くのトルコ人建築家や職人によって仕上げられた。また、再建にあたって、トルコ全土から多額の寄付が寄せられた。

1階にはトルコの美術品が展示され、講座などに使われる広間がある。上階の礼拝堂は最大2,000人収容可能で、女性用の礼拝室もあり、専従のイマーム(導師)もいるなど、日本国内では最大規模のモスクである。

毎日5回の礼拝の時間に開館されており、東京周辺に住むトルコ、パキスタン、インドネシア、マレーシア、バングラデシュ、日本などのイスラム教徒が礼拝に訪れる。毎日の礼拝への参加者は5~10人、金曜日の礼拝への参加者は350~400人。

**32. 日本民藝館** 民藝品の蒐集や保管、民藝に関する調査研究、民藝思想の普及、展覧会を軸に活動している美術館。

本館、堀、西館長屋門等は国登録有形文化財

1936(昭和11) 民藝運動の主唱者だった柳宗悦により開設。本館は木造2階の蔵造り風

1982(昭和57) 新館(RC造)が竣工

西館：旧柳宗悦邸宅、長屋門：北関東の豪農の家から移築した明治期建設の石屋根の長屋門

**33. 東京大学駒場IIキャンパス(駒場リサーチキャンパス)**

生産技術研究所、先端科学技術研究センター、国際・産学共同研究センター、駒場オープンラボラトリーがある。

1923(大正12) 関東大震災後、被災した越中島の東京帝国大学航空研究所が、駒場IIキャンパスの敷地に移転

1964(昭和39) 東京大学航空研究所が改組され、東京大学宇宙航空研究所が設置された

1981(昭和56) 宇宙航空研究所は宇宙科学研究所(ISAS 現宇宙航空研究開発機構(JAXA)・宇宙科学研究所)に改組

1987(昭和62) 先端科学技術研究センター設置 1989(平成元) 宇宙科学研究所が相模原キャンパスに移転。

2001(平成13) 生産技術研究所が六本木から移転

現存する旧東京帝国大学航空研究所時代の建築。設計はいずれも内田祥三・清水幸重

1号館(旧風洞部研究室 1928) 13号館(旧本館 1929) 登録有形文化財。

22号館(旧発動機部研究室 1930) 工作工場(中央工場第1号館 1929)

## 【町名など】

**代々木** 代々木の名は「江戸名所図会」などによると、現在の明治神宮の御苑東門（旧井伊家下屋敷）近くに、代々、樅の大木があったことに由来するという。この木は幕末には品川沖の外国船の偵察にも利用されたと言われ、戦前まで枯れ木として残っていた。戦前は代々木西原から隅田川の花火が見えたというが、本当に品川沖までが見通せたかは不明。この木は昭和20年5月の空襲で焼失し、戦後、新たな木が植えられている。代々木の名の由来には、この地で代々、自莢（さいかち）の木を栽培していたからという説もある。戦国時代には現在の代々木八幡宮の場所に太田道灌が砦を造った。

**上原** 代々木本村は宇田川の流域の低地で、この本村から見て高台側の平坦地であることから。

**西原** 1丁目には、戦前は文部省体育研究所があり、戦後は東京教育大学体育学部キャンパスとなった。東京教育大学が1978年に廃止され、跡地は現在、渋谷区スポーツセンター、老人福祉施設、ガールスカウト会館になっている。西原の名は、代々木本町からみて西に位置する畑地帯であったためとも考えられている。

2丁目の西端、狼谷と呼ばれた一角には、戦前、森永製菓創業者の私邸があった。戦後、その敷地はGHQの接収を経て医療少年院となり、昭和50年代以降は国際協力機構東京国際研修センターなどになっている。

**富ヶ谷** 宇田川と河骨川の2つの谷が合流する地点であり、富ヶ谷の名はこの谷に由来する。また、昔から貝殻の化石が多数出土しており、そのためこの地が「留貝（とめがい）」と呼ばれ、これが転訛したとする説もある。

**駒場** 元々、荏原郡上目黒村の一部で、現在の大橋の大部分、青葉台の一部を含む地域名。江戸時代には將軍家の鷹狩場が設けられたこともあり、狩りの際に利用する馬を止める場所（駒場）があったことが由来とされる。

幕末には、江戸幕府がこの鷹狩場の土地を、練兵場として整備する構想をたてたが、農地を奪われることを恐れた周辺村の農民が一揆を起し（駒場野一揆・1867年）、大政奉還で幕府が倒れたこともあり練兵場計画は実現しなかった。明治時代以降は、農業関係をはじめ各種研究・教育機関の立地が進み、文教の地としてのイメージが定着していった。

**池尻** 「尻」は「出口」という意味で、池や沼や湖が川に落ちる部分のことを示す。北沢川と烏山川が合流し目黒川となる付近は沼沢地帯で、その末端の場所だったからという。「いけしり」や「いけのしり」という呼称もある。

## 【参考文献・参考サイト】

- 『江戸東京坂道事典』石川梯二、新人物往来社、1998      『今昔東京の坂』岡崎清記、日本交通社出版事業局、1981  
『渋谷の坂』渋谷区白根記念郷土博物館編、渋谷区教育委員会、1985      『東京の坂風情』道家剛三郎、東京図書出版会  
『東京の階段』松本泰生、日本文芸社、2007      『凹凸を楽しむ 東京坂道図鑑』松本泰生、洋泉社、2017  
『川の地図辞典—江戸・東京23区編』菅原健二、之潮、2007  
『凹凸を楽しむ 東京「スリバチ」地形散歩』皆川典久、洋泉社、2012      『同2』皆川典久、洋泉社、2013  
東京23区の坂道 <http://www.tokyosaka.sakura.ne.jp/index.htm>      坂学会 <http://www.sakagakkai.org/>  
Wikipedia ほか